
たった一言の「好き」

きよこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった一言の「好き」

【Nコード】

N4173A

【作者名】

きよこ

【あらすじ】

大塚秋。大学4年。就職活動の帰りに訪れた駅ビルにずっと片思いをしていた彼が働いていた。告白もしないままに終わった恋は秋の心にずっとひっかかっていた。久しぶりの出会いに浮かれる秋だが、彼はなんと・・・?!

第1話 再会

片思いで終わった恋はどうしてこうも心に残るのだろう。

彼の照れた顔や、私をからかった時に見せるちよつと意地悪な笑顔。いつもいつも2人でじゃれあつて、笑つてた。

いい思い出。

つきあっていたら見えただけの彼の悪い部分も浮かれた片思いの中では気付くことも無かった。

だからこそ、彼は私の心の中で、まるで王子様のように未だ輝いて見えるのだ。

けれど、実らなかった恋は後悔として、心の片隅でうずいてる。たつた一言の「好き」

それが言えなくて、わだかまったままの私の心。

あの時に戻りたい。

そしてたつた一言、伝えたい。

「好き」

私の名前は大塚秋。大学4年。

彼はいるけど、未だに高校の頃の片思いをひきずってる。

高1の頃始めたファミレスのバイトを1年頑張った頃、

彼がアルバイトとして入ってきた。

私高2。彼は高1だった。

年下の彼は甘え上手で、私にとってもなついてた。

原チャの免許を取った私によく、甘えた声で「送ってよ。」とせがんでたっけ。

私もつい、彼を送ってあげたりして。

甘やかしてた。

周りも認めるほどの仲のよさだったから、
私は心の中で期待してた。

つきあえるんじゃないかって。

だけど、彼はバイト始めて半年後、私に笑顔でこう言った。

「オレ、秋ちゃんより先に恋人できちゃった！」

就職活動の帰り、つかれた足をひきずって、駅に降りる。

大学4年春。少しずつ内定をもらう友人が増えていく中、

私は進まない就職活動にうんざりしていた。

黒いスーツもうざったいし、足に合わない靴も嫌になる。

春のパステルカラーをまとって行きかう女の人たちがうらめしい。

「・・・気分転換に服でも見てこうかな・・・」

ふと、そんな考えが浮かび、駅ビルを振り返る。

春らしいピンクのワンピースを着たマネキンがガラス越しに私を呼んでる気がする。

お金は無いけど、たまにはいいか。

私は久々の買い物に少し浮かれながら駅ビルへと歩を進めた。

すっかり春色に染まった駅ビル内。

この駅ビルに来るのは2、3年ぶり。

すっかり変わった駅ビル内をぶらぶら歩き、物色する。

やっぱり春はパステルカラーだよな。

そんなことを考えつつ、

目に留まった淡いグリーンのトップスを手に取った時だった。

「それ、人気あるんですよ。」

男の店員の声に顔を上げると、

私は思わず「あ！」と声をあげてしまった。

店員は一瞬困惑の表情を浮かべたが、

私の顔を指差し、あの頃と変わらないちよつとはにかんだ笑顔で大声をあげた。

「秋ちゃん!!」

そう、彼だったのだ。

本格的に就職活動に入る前にはやめたけれど、

私はファミレスのバイトを大学3年の秋まで続けた。

彼は高校卒業と同時にバイトを辞め、その後1年は連絡を取っていった。

つまり、私が大学2年、去年の3月まで。

その間、彼は高1のときに付き合った彼女と付き合ったり別れたりを繰り返し、

そのたびに私は一喜一憂。

別れたと聞くと、「告白をしよう!」と決意し、

勇気が出ないまま、うじうじしている内に、

彼は彼女とよりを戻していた。

そんなことの繰り返しにうんざりして、

彼との連絡を半年絶った。

けれど、やっぱりあきらめられなくて、彼のケータイに電話したら。知らない男の人がでた。

彼はケータイを変えていて、それを私に教えてくれなかったのだ。

「友情さえも終わったか・・・」

ある意味で、完全にあきらめるいい機会だった。

だから、その頃私に告白してくれた人につきあうことにした。ひきずる気持ちを抑えて。

「秋ちゃん、変わってないね。」

「あんたはおしゃれになったね。」

「だって、洋服屋の店員だもん。」

そう言つてにつかり笑う。
変わらない無邪気な笑顔。

そういえば、都内の洋服屋の店員になつたつて言つてたっけ。
場所とか聞いたけど、

「まだ新米で恥ずかしいから内緒！」つて言つて教えてくんなかった。

「なんでスーツ？」

「就職活動だよ。もうくたくた！」

「大変だね。なんならうちで働く？」

「接客業はもういいよ」

「確かに！秋ちゃん笑顔が怖かったもん！」

「なんだと？！」

昔通りの会話。

変わつてない。

それだけのことに涙がでそうになる。

「あ。あきちゃん、ケー番とメアド教えてよ。」

「・・・前から変わつてないんですけど。」

彼は決まり悪そうに笑つた。

「ケータイ壊しちゃつてさ、オレ、ファミレスの時の仲間の全部わかんなくなっちゃつたんだよね。」

そんな理由だったのかよ！！

思わず突つ込みそうになるのをぐつと抑える。

嫌われたとか、彼女が私の存在にキレたとか、色々悩んだのに！

「相変わらずアホなんだから。」

持っていたメモ用紙にケータイの番号とメアドを書き込み、手渡す。

「ありがと！バイト仲間で遊ぶ時は呼んでよ！」

「うん。」

そういえば、バイト仲間ともしばらく会つてない。
これを機会に久々に集まるのもいいかもしれない。
そんなことより。

ああ、でも私だって彼氏がいる。
だけど、やっぱり気になる。

「彼女とは・・・どうなの？」

精一杯の勇氣。

聞いたところでどうするってわけでもないけど・・・

つきあっていても別れているにしても。

でも気になってしまふのはやっぱりひきずっているからなのか。
私ってなんてあきらめが悪いんだろう。

「ああ。うん。」

なんだろう。この反応。

今まで見たことが無い。

うつむいて、頭をかいてる。

「何？結婚とか？」

冗談で聞いたら。

彼は「秋ちゃんエスパー?!」

と顔を真っ赤にした。

え？まじ？

頭の中が真っ白になる。

「しかもあとちょっとしたら子供産まれるんだ。」

彼はもうゆでだこのよう。

私は真っ青だ。

気付いたら家にいた。

いつの間にか買ったのか、淡いグリーンのトップスが入った袋が転が
ってる。

ケータイが鳴る。

画面を見ると、彼からのメールだった。

「5月に式あげるから2次会来てね！」

もうなんだか頭が回らない。

第1話 再会（後書き）

出来れば感想お願いいたします！

第2話 決意

11月16日は彼の誕生日だった。

その時彼は彼女と別れていた。

チャンスだった。

でも、やっぱり「好き」なんて言えなくて。

私は彼にメールした。

「誕生日おめでとう！プレゼントは無いけどね。」

そのメールへの返信は無かった。

やってしまった。

彼は私の感情に気付いて、引いてしまったのかもしれない。
どうしよう。

余計なことをした。

恋にはマイナス思考の私は、後悔の渦にさいなまれた。

もんもんした気持ちを抱えたまま、バイト先のファミレスに行って、

彼の顔も見れずに働いていたら、

彼が私のそばに近づいてきた。

目を泳がせる彼。

「・・・何？」

メールの事があるから、私は彼の顔が見れなかった。

「用が無いなら仕事しなよ。」

彼と私に沈黙は合わない。

私が彼に背中を向けたその瞬間だった。

彼はとても小さな声でつぶやいた。

「メールありがと。」

心臓が跳ね上がる。

とても些細なことだけど。

この時の彼の照れた顔は一生忘れられないとその時思った。

「秋！あーき！」

はっとして顔を上げると彼氏の俊雄が、ふてくされた顔で私を見ていた。

「ごめん。何？」

「今日ずっとボーっとしてんな。なんかあつたの？」

「いや、ただ単に就活に疲れてるだけ。」

1ヶ月前、同学年の俊雄は内定をもらった。
うらやましい限りだ。

「秋もすぐ見つかるって。」

見つかなかつたらさ、おれんとこに永久就職すりゃいいし！」

永久就職・・・彼は彼女と結婚すると言った。

しかも子供まで！

想像もしてなかった。

あれだけ付き合い合ったり別れたりを繰り返してきたカップルだけど、
なんだかんだ言っつてずっと付き合い続けてる・・・そこまでは想像
してはいたけど。

まさか結婚！！

まさか子供！！

「秋ってば。」

「は？」

「オレ、今プロポーズしたんだぞ？」

俊雄が口をとがらせる。

「冗談に付き合ってる暇はないの！就職相談室行つて来る。」

「オレは本気だぞ？」

俊雄は付き合い初めからずっところだ。

永久就職だとか、結婚とか、本気ならこんな軽い口調で言われたくない。

乙女チックかもしれないけど、ちゃんと指輪を用意して、ちゃんと
本気の言葉で言われたい。

だから、私は俊雄のこういう言葉は常に無視。

彼は・・・何て言ってプロポーズしたんだろう？

なんだかむしゃくしゃする。

俊雄のこと、好きだ。

でも、彼のが頭から離れない。

こんな自分が嫌になる。

気持ちが残ってる。

あの頃、彼に恋してた心が片隅にいる。

突然の再会に戸惑うのは当然の事だと思う。

後悔だ。

そう、後悔。

友達という関係が崩れることを恐れた臆病な私。

彼とたわいない会話をずっと続けていたかったから、飲み込んだ言

葉。

でも・・・伝えていれば、変わったかもしれない関係。

もしかしたら、今彼の横で笑っていたのは私かもしれない。

馬鹿な考えだと首を振る。

彼が私に対して、そういう感情を持っていなかったことは恋愛に疎

い私にだってわかってた。

だから、玉碎覚悟で告白することより、

安穩としてられる友達を選んだのだ。

間違った選択だったのか。

後悔してるということは間違っていたということなのか。

恋人になることより友達というポジションを守りたいと思っていたの

は、

真実だ。

だから、連絡が取れなくなった時は本当にショックだった。

友達というポジションは彼にとって不要だったのだと。

けれど、違った。

安心した。

戻る。

友達だけど、あの頃のような関係に。

でも！結婚する男とあの頃のようにじゃれあって遊ぶなんて、

奥さんになる人がかわいそうなだけだ。子供だってできるのに！

はっと気付くと彼の働く駅ビルの前にいた。

私、夢遊病みたいだ。

やばい。

こういうのも軽くストーカーと言わないか？

このままじゃやばいだけだ。

ちゃんと気持ちにけりをつけなければ。

後悔してるなら。

もう後悔しないように動かなければ。

第3話 勇気

「オリオン座はっけ〜ん！」

原チャで送ってあげたある日、彼はうれしそうに夜空を指差した。

「あんた、バカ？」

彼がさした方向は見間違い。

「オリオン座はあれだよ。真ん中に三ツ星があるやつ。」

「え？本当？秋ちゃんあたまいいねえ！」

「そんなの常識だよ。」

あきれ私を尻目に彼は「あれは？なんていう星座？」と適当に夜空を指差す。

「知らないよ。詳しくないもん。」

「ふうん。じゃああれは秋ちゃん座だな。」

「意味わかんない！」

思わず吹きだす。

彼はいつもそうだった。

明るくてお調子者。

変なことばかり言っていて。

でも、そんなところがなぜか好きだった。

いつの間にやら来ていた彼の働く駅ビル。
こんな行動を取ってしまった私は一切どうしてしまったのだらう。

俊雄という彼氏がいる。

いるのに、昔好きだった男を追いかけてる。

「ごめん俊雄・・・」

彼の働くショップを覗くと彼はいなかった。
休みだったのか。

なんとなく安心して帰ろうとした時、彼がニヤニヤと笑いながら横にいた。

「ビックリしたぁ・・・」

「秋ちゃん気付かないんだもん。」

「声かけてよ!」

「いつになつたら気付くかなあと思って。」

ニヤニヤ笑いがさらに増す。

この顔に私はいつも弱かった。

「で? お買い物?」

そう聞かれて、私はここに来た目的が何だったのか、考えてもいなかったことに気付いた。

後悔しないように動かなければ。

そう思つて来たけど、何をするつもりだったんだろう。

・・・そう、会いに来た。

会いに来たんだ。

でも、それを正直に言えるわけがない。

「あ、ええと・・・これ、このキヤミ、昨日買い忘れてさあ。」

適当にその辺にあつたキヤミソールをつかみ、彼に手渡す。

「昨日? これ、今日入荷したやつだよ。」

「え?! じゃ、じゃあ似たようなやつがあつたはずなんだけどなあ

! あはは」

自分でも何言つてるのかよくわからない。

彼も不思議そうに首をかしげながら、

「じゃあ、これ買うの? キヤミだけど、ちょっと高いよ?。」

値札を見ると結構なお値段だった。

「・・・考える。」

彼の手からキヤミを奪うと、陳列棚に戻した。

私はバカだ。

何がしたいのか自分でも全くわからない。

「秋ちゃん。時間あいてる?」

「え？なんで？」

「これから休憩だから、ゴハンつきあってよ。」

他愛ない会話を交わしながら、食事をする。

彼はうれしそうに結婚することになった経緯を語る。

16歳からずっと付き合ってきた彼女。

20歳を過ぎたら結婚したいとずっと思っていたこと。

早く子供が欲しくて仕方なかったこと。

彼の気持ちがずっと彼女に向いていたことが伝わってきた。

私に付け入る隙はずつとなかったのだと少し落ち込む。

「秋ちゃん？彼は？」

迷った。

いると言うことが、なぜか言いづらかった。

「秋ちゃんかわいいのに彼はつくくんないから心配してたんだよ。」

「ほんとお？」

かわいいと言われて顔が緩む。

「もしかしたらレズなんじゃないかと思って。」

「彼はいるから！」

彼の思わぬ言葉に思わず彼氏の存在をばらしてしまった。

私って・・・バカ。

私には彼に伝えなければいけない言葉があったはずだった。

でもいつもいつもその言葉は、のどの奥に詰まってでてこなかった。

その度落ち込んで。

そんなことの繰り返しに疲れていたはずだ。

なのに彼を目の前にするとやっぱりあの言葉がでてこない。

伝えたいのに、伝えられない。

怖がっていたら前に進めないのに。

だから、動こうと決意したのに。
過去の私を清算したい。

あの時の気持ちにけりをつけたい。

・・・俊雄とのこれからのためにも。

「あのさ。」

パスタをチュルンと吸い込んで、彼が私を見た。

「あのね。」

「うん？」

口をモグモグ動かしている彼はなんだか間抜けな顔だ。

「・・・彼女さあ、怒らない？私と2人でご飯食べたなんて知ったら。」

「大丈夫大丈夫！秋ちゃんのこと信用してるから！」
信用してる？意味がわからない。

「秋ちゃんとオレがやましい関係になるなんて絶対無いじゃん！
マブダチじゃん！カノジヨもその辺わかってくれてるからさ。」

・・・本気でへこむから。

結局私はまたもや何も言えなかった。

第4話 後悔

あれはそう、バイト先の送別会の日。

誰の送別会だったかは忘れたけど、彼と私は抜け出して、二人、星空を見てた。

「秋ちゃん座発見!」

「だからそれ意味わかんないから。」

彼はウォークマンを取り出し、にっこりと笑った。

「聴く?」

左側に彼、右側に私、イヤホンをつけて。

流行のバラードが流れる。

「ロマンチックじゃない?!」

からかうような彼の声。

「まあね。」

「あきちゃんと同じじゃあんまりロマンチックじゃないかあ」

「・・・むかつく!」

彼と共有する空間はあまりに心地よくて。

それを壊すのが怖かったんだ。

大学の食堂。

いつもは俊雄と一緒に昼ごはんを食べるのだが、今日は俊雄に会う気になれず、友人の元へ向かった。

「久しぶりに一緒にご飯食べるね。」

友人の真由はうれしそうにサンドイッチをほおばる。

「俊雄君と付き合いだしてから、私の存在なんて忘れていちゃっっちゃってさ。」

女の友情は冷たいね!」

そう言って真由はあははと笑った。

「でもさ、急に私のところに来たってことは俊雄君となんかあったの？」

大学の入学式で知り合った真由とは、いつも一緒に行動していた。だから、私の変化にするどい。

「俊雄とは何も無いんだけどさ。」

私の次の言葉を促すように、真由が「うんうん。」とうなづく。

「昔すごい好きだった人と偶然会っちゃってさ。」

気持ちが昔に引き戻されてるの。

だから俊雄に合わす顔無くて。」

「それって、昔の男に再燃しそうってこと？」

核心を突く言葉。

真由はこういうことをストレートに聞いてしまう。

ある意味、話が進みやすくていいのかもしれないが。

「再燃とは違うんだよね。なんていうか・・・気持ちを伝えずに終わったから、後悔してて。」

「それで？」という真由の顔は少し呆れ顔だ。

「でもね！彼、結婚するんだって！子供出来たんだって！」

笑ってくれるかと思っただけ少しおちゃらけて言ったが、真由の表情は変わらなかった。

「じゃあどうしようもないじゃん。」

「しかもこの前会った時マブダチって言われた・・・」

真由はブツツと思い切り笑った。

「それじゃよけいどうしようもないじゃん！！」

悩む意味が無いよ。」

「そうなんだけどさ。」

真由がふとまじめな表情を見せる。

「そりゃさ。伝えられなかった分、気持ちが残っちゃってるんだろうけど。」

大事なものは過去じゃなくない？

今そばにいてくれる人じゃない？

過去の事をうじうじ悩んでるだったら、過去にあったことを糧にして、今そばにいる人を大事にすることの方が大切だと思うんだけど。」

「一呼吸おいて、真由は言う。」

「過去の後悔は、今後悔しないように行動するためにあるんだよ。」

夜、彼から電話が来た。

「秋ちゃんさ、結婚式の二次会来るよね？」

「うん。」

「じゃあ詳しいこと決まったらメールするね。」

「うん。」

本当に彼は結婚してしまうんだ。

もやもやする気持ちが広がる。

「秋ちゃん、オレの将来のおくさんとしやべる?!」

うんともすんとも言っていないのに、彼の将来の奥さんが電話に出てきた。

「こんにちは。お久しぶりです。私のこと覚えてます?!」

聞き覚えのある声。

いや、知っている声だ。

彼の彼女はバイト先で何度か会ったことがある。

小柄だけどスタイルのいいかわいらしい子。

「うん。覚えてるよ。久しぶり。結婚おめでとう。」

ほんととはあんまりおめでたいと思って無いのに、口からは調子のいい言葉が出てくる。

「秋さんに会いたかったから二次会来てくれるって聞いてうれしかったんです。」

あ！二次会には彼氏さんと来て下さいね！」

かわいい顔してなんて小憎らしいことを言ってくれるんだろう。

とんでもない発言した彼の彼女を怒鳴りつけたい衝動を抑えつつ。

「ああ・・・。来るって言ったらね・・・。」
と電話越しにあいまいに笑った。

第5話 誤解

「秋ちゃんは将来何になりたい？」

バイト中、彼がポツリと聞いてきたことがあった。

「んゝま、普通にOLかな。」

夢は特に無かった。

しいていえば、お嫁さん？

「オレはお嫁さんになりたいな。」

ぶつと思わず吹きだす。

「何言つてんの？」

「だってほんとにそう思ってたんだよ。」

前に、彼の両親の仲があまりよくなくて、もしかしたら離婚するかもしれないことを聞いたことがあった。

それを思い出す。

幸せでない家庭で育った彼は、幸せな家庭を早く作りたいと願っていたのかもしれない。

その時私はそんなことを思った。

「あんたは、大丈夫だよ。」

「何が？」

「ちゃんと幸せなお嫁さんになれるってこと。」

彼はすこし顔を赤くして、うれしそうに笑った。

「俊雄！」

講義の後、彼の結婚式の二次会の事を話そうと俊雄の元に駆けつける。

俊雄はどこか不満そうな顔をしていた。

「何？」

口調もなんか冷たい。

「あのさ・・・」

私が言いかけたのをさえぎり、俊雄は私の腕を引っ張った。

「オレも話したいことあるから、学食行こう。」

昼前の学食は人もまばらで閑散としていた。

一番奥の席に着く。

「秋さ、最近オレの事避けてるだろ？」

どきりと心臓が鳴る。

やっぱり避けてるのばれてたか。

「・・・別れたいわけ？」

「は?!」

俊雄の真剣な表情は、怒っているようにも、悲しんでいるようにも見えた。

「秋がオレの事本気で好きで付き合いだしたわけじゃないのは、わかってた。」

でも、付き合いつくうちに秋も本気になってくれるだろうと思ってただけだよ。」

「何、言ってるの？」

俊雄の言う通りだ。

私は、彼をあきらめるために、その時ちょうど告白してくれた俊雄と付き合いだした。

俊雄が好きと言ってくれた時、私は俊雄が好きだとは言えなかった。でも。

今は、今は違う。

付き合い合うことで見えた俊雄の優しさや、自然でいさしてくれる包容力に私は惚れた。

そんな気持ちをどう伝えていいのかわからず、口をパクパクしていると、

「・・・オレ、次の講義、行くから。」

すっと立ち上がり、俊雄は足早に去っていった。

私は金魚のように口をパクパクさせたまま、呆然とそれを見ていた。

なぜ、こんなことに？
理由はただひとつだ。
私の気持ちがおかしな方向を向いてる。
定まらない気持ちの揺らぎが俊雄に伝わってしまった。
はつきりさせなければ。
けじめをつけなければ。

私は再び、彼の働くお店に来ていた。
真由は言った。

過去の後悔は、今後悔しないように行動するためにあるのだと。
私の後悔。

何度決意し、何度挫折したことだろう。

壊れるのが怖くて逃げてきた。

けれど、逃げて逃げてその先にあったのはただの後悔。

過去の思いに囚われるのは、もう終わりにする。

俊雄と向き合うために。

私自身の未来のために。

彼の働く姿が目映る。

「また来ちゃった。」

彼の前に躍り出ると彼は驚いて後ろにのけぞった。

「秋ちゃん！」

「あんたの結婚式の二次会の服、買いに来たんだ。
なんかいいのある？」

彼は「あるよ」と言いつつ、迷うように店内をぐるりと見渡した。
「ああ、これ。秋ちゃんに似合うよ。」

彼が引っ張り出してきたのは淡いピンクのシフォン素材のワンピース。

「ええ？かわいすぎない？」

「秋ちゃん、なにげ目はうちり系だから、こういう淡い色似合うんだよ。」

そう言われて悪い気はしない。

試着してみると、けっこういい感じだ。

「ん。これにする。」

「決断早いね」

レジに行き、清算する。

「今日は休憩行った？」

「あと1時間後位かな。」

「じゃあ、待つてるから。ちょっと話したいことあるんだよね。」

彼の顔が見れない。

こうすることが本当に私にとっていいことなのだろうか？

俊雄を誤解させている今の私の行動は、果たして正しいと言えるのだろうか？

「わかった。休憩入る時、電話する。」

私は「じゃ、あとでね。」と、彼の顔も見ずに、お店を出た。

顔がほてっている。

熱くなっている自分の顔を押さえて、これはばれればれに赤い顔だとなつくりする。

私は・・・未だに彼が好きなのだろうか？

それとも俊雄だけをちゃんと好き？

自分の気持ちかわからない。

第6話 告白

大学3年の季節は秋。

今から約半年前。

同じサークルの俊雄が私に告白してくれた。

紅葉が赤く色付く大学の中庭で、俊雄は紅葉みたいに真っ赤な顔で、

「秋。付き合おうよ。」

そう言った。

同じサークルで、いつもつるんでいた仲間からの告白に私はとても戸惑った。

「考えさせて。」

俊雄は、やっぱりそう言うと思ったよと笑って、

「今オレのことたいして好きじゃなくてもいいからさ。

つきあってほしいんだ。」

少しの間のおと。

「オレは秋のこと好きだから。」

真摯な言葉がうれしかった。

彼からの着信がなり、私と彼は落ち合った。

近くにある公園に訪れると、すっかり春の陽気になっていて心地よかった。

桜はすでに散っていて、少しだけ青い葉っぱが生えていた。

芽生えの季節なんだなんて、どうでもいいことを考える。

彼は私の少し後ろで、気持ちよさそうに春の風を浴びていた。

「結婚前の人にこんなこと言うなんて、バカかなと思うんだけどさ。」

出し抜けに私は言った。

「・・・これはケリなんだ。」

私もちやんと自分の未来を見たいから。」

彼はだまっつてうなづく。

スウと深呼吸。

気持ちいい空気が肺に充滿する。

ふーと吐き出す。

吐き出すと同時に言葉はすんなりと口から出た。

「あんたのこと、好きだったんだ。」

あれ？私、過去形で話してる。

「だった」と今、過去形で言った。

自分の言葉に自分が驚く。

素直に出る言葉は、端から端まで素直なんだ。

どうして今まで気付かなかったかな。

ああそうか。

混同してただけ。

過去の気持ちだったんだ。

この瞬間、私は実感した。

気付くのが遅れたけど、私の中で今、恋する気持ちを育てているの

はただ一人、別の人に対してなんだ。

「過去形の気持ち、だけどね。」

私は彼に笑顔を向けてそう言っていた。

彼への気持ちはちゃんと過去形だった。

そう確信して、うれしいような悲しいような不思議な感情が胸に沸

き起こった。

それは、涙となって、瞳を潤わせる。

「ありがと。」

はつと彼を見ると、彼は泣きそうな顔で、笑ってた。

「秋ちゃんはオレにとって、すっごく大事な存在。

ケータイ壊れて連絡取れなくなった時もちょー悲しかったんだよ。」

こんなこと言われて、泣かないわけ無い。

たまっていた涙がぼろぼろと落ちる。

これは過去の私の涙。

彼に恋して、彼を思い続けたあの頃の私の涙だ。

「カノジヨに対する好きとは違うけど、オレ、秋ちゃんのこと大好きだよ。」

ああ。浄化されてゆく。

ほら、聞いた？

彼に恋してたあの頃の私に問いかける。

自分の気持ちを素直に伝えて、その答えが返ってくる。

たとえ答えがNOでも、伝えることが大事だったんだ。

私は染み入るように心に浸透する彼の言葉を反芻する。

よかった。

伝えることが出来て。

後悔して泣いていた私が、心の中でにっこり微笑む。

「私も、カレシに対する好きとは違うけど、あんたの事、今でも大好きだよ。」

恋愛としてではなく、友達として。

気持ちは形を変えて、好きという心を紡ぐ。

「これからも、友達！」

私がニイと歯を出して笑顔を作ると、彼も真似して笑った。

「おう！マブダチ！」

爽やかすぎるかな。

でも、これが私たちには合ってる気がしたんだ。

ありがとう。

好きという気持ちを教えてくれて。

悲しいことも、つらいことも、楽しいことも、うれしいことも。

彼がいたから味わえたたくさんの思い出。

そのすべてを。

胸に抱いて。

新たな恋へ、歩き出そう。

俊雄のケータイに電話をかける。

不機嫌そうな俊雄の声が、ケータイから聞こえてきた。

「5月にね、友達の結婚式があるの。」

その二次会、俊雄も一緒に来てくれる？」

俊雄の声はいつそう不機嫌さを増す。

「なんで、俺が全く知らないやつとの結婚式の二次会に行かなきゃいけないんだよ？」

「紹介したいから。私のカレシですって。」

俊雄は黙ってしまった。

私も何も言うことが出来ず、お互い無言の時間が流れる。

「・・・もしもし？」

その空気に耐え切れず、言葉を発すると、俊雄のため息が聞こえてきた。

「考えとくよ。」

電話はぷつんと切れてしまった。

第7話 明暗

どうすればいいのか・・・

真剣に悩んだ。

俊雄に告白されたその日の夜、私は夕飯も食べずに悩んでた。

好きな人がいる。

忘れられない人がいる。

でも、いい加減、別の人を好きになりたい。

連絡の取れない彼を思い続けてたら、いつまでたっても私は一人の
ままだ。

俊雄のことは友達として好きだった。

明るくってノリのいい少し兄貴分な感じの俊雄は、一緒にいて楽し
かったし、

居心地が良かった。

付き合ってから好きになるパターンの方が多いんだよ。現実には。

誰かがそう言っていたっけ。

一歩踏み込んでみよう。

それが彼を忘れるためだとしても。

次の日、私は俊雄を中庭に呼んだ。

「返事？」

俊雄が不安そうに私の顔をのぞきこむ。

私は、どんな表情をすればいいのかわからなくて、そっぽを向いて、
言った。

「・・・よろしくお願いします。」

それが私と俊雄の始まりだった。

真由と二人で、構内を歩いていると、廊下の向こうから俊雄が来る
のが見えた。

「俊雄。」

呼びかけると、俊雄はむっとりとした顔でちらりと私を見ただけで、トイレに入ってしまった。

「なに？けんかしてるの？」

真由が怪訝そうに言う。

「けんかしてるっていうか・・・私が俊雄のこと避けてたのがばれて、俊雄が怒ってる。」

「で？前好きだったやつとはどうなったの？」

やっぱり真由はストレートに聞いてくる。

「告白した。」

「はあ?!」

真由の目がこぼれんばかりに見開く。

「・・・だって、言わないでいるの、きつかったんだもん。」

「それで?!」

「すつきりした。」

真由の目がつてもすわってて怖い。

「なんでそうなるわけ？」

もつともな意見だ。

「・・・ずっと、ためこんでた気持ちを吐いたら、自分の気持ちが見えただよ。」

私が今一番大切な人が誰か。」

ちよつとクサイセリフを言ってしまったなと、ごまかすように笑うと、真由も笑ってくれた。

「でも、俊雄は怒ってるんでしょう？」

「どうするの？」

私はあいまいに首を振る。

どうすればいいのだろう。

このままの状態を続けていれば、私たちの関係は終わりを迎えてしまいかもしれない。

それだけは嫌だ。

「話をしてみるよ。」

真由が私の肩をたたいて、「頑張れ。」と応援してくれた。言葉足らずな私が、ちゃんと俊雄と話せるだろうか。

不安はあるけれど、しっかりしなければ。

やっと自分の気持ちを正直に告白できるようになったのだから。

ケータイに電話をかけ、講義の終わった俊雄を呼び出す。そこは中庭。

秋には紅葉、春には桜が咲く、眺めにいい場所だ。

桜はほとんど散って、葉桜になっていた。

ついこの間までは咲いていたのに、月日がたつのはとても早い。

「秋。」

やっぱり不機嫌なままの俊雄がのろのろとやってきた。

「オレ、次の時間も講義あるんだ。」

話しあるなら早くして。」

この言い草に少しカチンとくるが、ここでキレたら元も子もない。

「ええと・・・」

決意を固めて彼に告白したあの日。

あんなにすんなり出た言葉が今日はなかなか出てこない。

俊雄が怒っているのがわかって、私は早くけりをつけたいとあの日、彼に告白することを決意した。

彼への気持ちを終わりにするために。

そして、今日。

私は、何を言えば、俊雄が許してくれるのか、全くわからないでいた。

「結婚式の二次会、どうする？」

なぜかそんなことを聞いていた。

「・・・行かねえよ。」

「そう・・・。」

私の目に涙がたまってくる。

こんな冷たい俊雄は初めてだ。

泣きそうになっているのがわかったのか、俊雄は少しだけ慌てていた。

ポケットにつつこんでいた手をだしたりひっこめたり。

動揺してる時の俊雄の癖だ。

「いつ？」

言葉が少し優しくなった。

「来週の水曜。」

彼は販売の仕事をしているため、式は平日だった。

「・・・講義、無い日だな。」

「うん。」

俊雄は最近ついてばかりいるため息をまたついて、

「行くよ。」

と言ってくれた。

「・・・ごめんね。」

振り回してばかりだね。」

とても、やるせない気持ちになっていた。

もう別れるのかもしれない。

彼の結婚式のその日が、私と俊雄の最後の日になるような気がした。

彼の幸せの日が私の不幸せの日になるかもなんて、なんて皮肉。

でも、最後になるかもしれないから、どうしても、俊雄と行きたかった。

「じゃあ、来週ね。」

葉桜を仰ぎ見て、中庭を出て行く。

ここ最近の出来事が走馬灯のように流れて、私はぎゅっと目をつぶった。

第8話 結婚

高校2年生、春。

恋をした。

無邪気で、明るくて、能天気で、バカな彼に、恋をした。

一緒にいると楽しくって、永久にこのままならいいのって思った。

高校2年生、初冬。

好きになった彼に恋人ができた。

失恋。

終わりを迎えたはずなのに、感情は消えなかった。

そばにいたくて、友達でいる道を選んだ。

大学2年、早春。

彼との連絡が途絶える。

終わり。

恋と、友情の、終わり。

大学3年、秋。

俊雄の告白。

戸惑いと、決断。

俊雄への気持ちは、はっきり言って恋ではなかった。

あきらめるための、布石。

大学4年、春。

彼との再会。

よみがえる思い出と恋心。

俊雄との不和。

私の気持ちは、方向性を見失い、さまよう。

そして、見つけた、ほんとの気持ち。

やっと、見つけた。

彼の結婚式の二次会の日。

駅で待ち合わせた俊雄と落ち合う。

俊雄はとても不満そうな顔のままだった。

「来てくれてありがとう。来ないと思ってた。」

そう言うと、俊雄は私の顔も見ずに、ぽつりと「約束だから。」とだけ言った。

ほんの少し前までは、けんかしてもこんな気まずい空気になることはなかった。

これが、終わりそうになっているカップルの雰囲気ってやつなのだろうか。

これが最後かもしれないのに、ほとんど会話も出来ないまま、会場のレストランに着いた。

「あきちゃん！ん！」

受付を済まして、レストランに入ってきた私と俊雄にすぐ気付いて、彼が走ってやってきた。

俊雄の顔が一瞬ゆがむ。

そういえば、男友達の結婚式とは言ってなかった。

「こんばんは！来てくれてうれしいよ！」

すでに二次会は始まっていたので、彼はすでに酔っ払っていた。

「おめでとう。」

「ありがとう。」

幸せな笑顔ってこういう笑顔の事をいうんだねって言いたくなるくらい、彼は幸せそうだ。

「あきちゃんの、カレシ？」

隣にいたひきつり笑顔の俊雄に、彼が問いかける。

「はじめまして。俊雄です。」

「はじめまして！あ、オレの奥さん連れてくるね。」
彼は意気揚々と店の奥に消えていく。

少して、幸せそうに笑う彼とカノジヨが歩いてきた。
似合わないタキシードの彼と、ふんわりオレンジのシフォンのドレスの似合うカノジヨ。

2人ともニコニコ笑顔で、私と俊雄にあいさつする。

「秋ちゃん、かっちょいいカレシ作ったね。」

「ね！美男美女！お似合い！」

私と俊雄をべたほめするから、私と俊雄の間に流れてた気まずい空気が薄らいで、私と俊雄は目を見合わせて、笑ってしまった。

「じゃ、2人とも、今夜楽しんでってください！」

しばらくの会話の後、彼は、カノジヨを連れて、他の友達のところへ行ってしまった。

「友達って男だったんだ。」

俊雄が私を軽くにらんで、そう言った。

「うん。」

隠し事はしたくない。

うそも方便とも言っけれど、話しておきたかった。

「昔、好きだった子。」

俊雄の口があんぐりひらいた。

「でも、昔だよ。」

「そっか。」

「うん。」

何も追求してこないのは、もう私のことなんて、どうでもいいのかな？

会場中に漂う幸せを祝う、幸せな雰囲気。

なのに、私と俊雄には、そんな雰囲気は全く似合っていない。

仲間と楽しそうに酒をあおる彼と、それを止めようと彼のビールを

奪おうとするカノジョが見えた。

本当に幸せそう。

彼の笑顔が嬉しいけど、なぜだか、せつない。

第9話 前進

恋をして、愛を知る。

それが恋愛というなら、私はまだまだ恋愛の初心者だ。

でも、恋も愛も、未熟ながらに学んできたはず。

踏み出せなかった一歩も、踏み出した一歩も、

私を大きく前進させる大事な道をつくってゆく。

何度も、後ろを振り返り、何度も、前を見据えた。

歩こう。

私の道を。

ビンゴ大会やら、じゃんけん大会やら、一通り終えて、会場は歓談の雰囲気だ。

いまいち盛り上がれない私と俊雄は、隅っこのテーブルに座って、ちびちびとお酒を飲んでいた。

「トイレ行ってくる。」

俊雄がトイレに行ってしまったのと入れ替わりで、彼がやって来た。

「秋ちゃん、楽しんでる？」

「うん。もちろん。」

ぎこちない笑顔で答えると、彼はふうとため息をついた。

「カレシとうまくいってないんでしょ？」

全然カレシとしゃべってないの、ばればれ。」

意外とするどい。

私は肯定もせず、否定もせず、口をつぐんだ。

「あきちゃん、素直じゃないからね。」

俊雄の方をちらりと見ると、トイレが混んでいるのか、トイレのところに立ったままだ。

「ケンカしてるの。どうすればいいかわかんなくて。」

彼はにつこりと微笑んだ。

「素直になればいいだけだよ。伝えたいこと、伝えればいいだけ。これ、オレの得意技。」

得意満面の笑顔だ。

そうだね。

あんとカノジョ、しょっちゅうケンカして別れたのに、また付き合ってた。

それは素直になって、伝えたいこと伝えたらなんだ。

「一言でいいんだよ。」

「うん。そうだね。」

彼は、胸ポケットにささっていた白い百合の花を取って、私に手渡してきた。

「あげる。」

私は厳かな気持ちでそれを受け取った。

ウエディングブーケみたいだったから。

彼もそのつもりだったんだろう。

「ブーケは、カノジョがカノジョの友達にあげたから、オレのは、オレの大事なお友達にあげようと思ってさ。」

キザな事をする。

私は笑いながら、泣いていた。

「次に幸せになるのが、秋ちゃんでありますように。」

「ありがとう。」

白い百合の花の香りを嗅ぐ。

洗練された心洗われる香り。

彼の幸せを、分けてもらおう。

「ありがとね。」

彼から、私はいろんなものをもらった。

恋する気持ち。

素直になる心。

幸せの笑顔。

彼が、世界一の幸せを手に入れたこの日。

私は彼から、幸せのかけらをもらった。

「幸せに、なつてね。」

私がそう言つと、彼は、「うん！」と言つて、世界一の笑顔を見せてくれた。

帰り道。

無言で前を歩く俊雄に並ぼうと駆ける。

街灯の少ない路地裏は、とても寂しげな雰囲気だ。

「俊雄！」

追いついても、歩くのが早い俊雄とはすぐ距離が出来てしまう。
「待つてよ！」

ぴたりと止まつて、ふり返る俊雄。

けれど、すぐ正面を見て、今度はゆっくり歩き出した。
怒つてるけど、優しい俊雄。

私は俊雄の横にたどり着き、俊雄の手を取つた。

彼からもらった百合の花を反対の手で握り締める。

たつた一言でいいんだ。

伝えたいことを伝えよう。

たつた一言。

それだけでいいんだ。

覚悟を決めて、私は言つた。

「……好き。」

俊雄の目が泳いで、私をとらえる。
初めてだった。

今まで、こんなにはつきり俊雄に気持ちを伝えたことはなかったのだ。

「何？もう一回言つて。」

恥ずかしいのに！

私はほっぺを膨らませながら、もう一度言った。

「好き。」

俊雄は「はあああ」と言いながら、しゃがみこんでしまった。

「ちょ、ちよっと。」

私もしゃがみこんで俊雄の肩に触れる。

「秋。」

「ん？」

腕の間にうずめた顔を起こし、俊雄は私を見据える。

「結婚しよっか。俺たちも。」

私は、道路にお尻をついて、笑ってしまった。

「俺は本気だぞ。」

俊雄は真顔でふてくされる。

「やだ。」

「なんで?!」

「就職して3年は働きたいもん。」

立ち上がるうとしながら言う、俊雄は手を貸してくれた。

「でも。」

俊雄の手をつかんだまま、もう片方の手を取る。

「3年したら、結婚してもいいよ。」

俊雄が顔を真っ赤にして、笑う。

私も笑う。

お互い向き合って、手を取り合い、笑いあう。

たった一言だけど、とても重要な言葉。

伝えて、伝わって、気持ちはずながる。

彼が教えてくれたことが恋なら、

俊雄が教えてくれたのは、恋愛なのかな。

これからも一緒にいたいと思わせてくれた人だから。

これからも伝えていこう。
たった一言の「好き」を。

第9話 前進（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございます。

感想、ご指摘、お待ちしております。

恋愛ものではありませんが、もうひとつ連載物を書いておりますので、そちらも読んでいただけるとうれしいです（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4173a/>

たった一言の「好き」

2010年10月28日04時53分発行